

10分講話

— 祈り (IV) —

【音声】10分講話 祈り (第4回)「現存」— 神はどこに？

祈りは神との対話だとお伝えしました。ではその神はどこにおられるのでしょうか。それが今回のテーマです。「現存」(あるいは臨在)という言葉を使っていますが、日本語でこの言葉を単独で使うことはあまりないように思います。英語の presence からの言葉で、「そこにいる、存在している」と言った意味です。

実はわたしたちは今、「現存」という問題に直面しているということにお気づきでしょうか。コロナ禍によって今までと違ったコミュニケーションをとることが余儀なくされ、ごくあたり前のことであった人と人が直接に触れ合うことが困難なときを過ごしています。人となかなか会うことができない、あるいはパソコンの画面を通してしか会えないということが日常的になっている今、あらためてこのテーマを考えるととてもよい機会だと思います。わたしにとって誰かが「いる」、あるいは「神がおられる」というのはいったいどういうことなのでしょう。

この現存ということテーマに最近、海外のあるカトリック系の番組がありました。そこに登場された女性の体験からまずご紹介しましょう。彼女は最愛の娘を病気で失いました。その最後の一年はほとんど植物人間の状態で、言葉での会話はもとより、まなざしを交わすこと、あるいはその声を聴くといったコミュニケーションはまったくできなかつたと言います。けれどその女性は次のように語りました。「わたしの娘はたしかにそこに居ました。わたしは娘がそこに居ることを、そこに存在していることをどれほど強く感じたことでしょうか。」「娘はまったく自分からはコミュニケーションをとることができなかつたので、娘に近寄る人はだれでも自分の想いや考えを捨てさり、空っぽになって彼女と向かい合う必要がありました。そして沈黙のうちに語られる彼女の言葉を聞かなければなりませんでした。」「こうしてわたしは空っぽになって娘に向かい合うことによって、娘の存在そのものに触れたように感じました。」

そして女性の最愛の娘は亡くなりました。そのときの想いを彼女はこう語ります。「わたしは娘の遺体の前でおそろしいほどの孤独を味わいました。夫はわたしの隣にいたのですが、それはわたしにとってたいした慰めにはなりませんでした。」「けれどそのとき、わたしは心の奥深くで、『わたしはここにいる』という声を聞きました。そしてその声によってわたしは心を苛む孤立感から救われました。」「わたしの存在の奥深くにとどまり、そこからわたしに語りかけてくださったのは神でしかありえないでしょう。」

こうして自分の娘を亡くすという耐え難い、けれど濃密な体験を通して、この方は自分

にとって「現存」とは何かということを語ってくださいました。「わたしは娘を心から愛していました。自分自身よりも愛していました。その娘が亡くなり身体が消えたことは本当に辛い体験でした。もう二度と触れることはできないのですから。その苦しみが消えることはないでしょう。けれどその辛さとは裏腹に、わたしは娘がわたしの内で生きているということを実感しています。ですからわたしにとって「現存」とは愛です。」

現存とは愛、すばらしい洞察だと思います。わたしたちは体をもった存在です。聖書的な考えからすると、わたしたち人間は神と関わるものとして魂であり、世界と関わるものとして体です。ですから体によって人と関わるができないとき、当然それは痛みとなります。けれど魂として神に向かう人間は、たとえ身体的な不在のなかでも、だれかの現存を愛としてとどめることは可能なのでしょう。でも逆に言うと、体としては触れ合いながら実は不在ということもありえるのですね。こちらもまた辛いことです。

では、現存とは愛という言葉を中心にとめながら、愛の使徒であるヨハネの福音書に目を向けてみましょう。

わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたしの父はその人を愛され、父とわたしはその人のところへ行き、一緒に住む。(14章23節)

イエスの驚くべき言葉です。イエスの言葉を守る人、つまり新しい掟である、「わたし(イエス)が愛したように互いに愛し合いなさい」というイエスの言葉を守る人のところに御父と御子が来て住まわれる。御父と御子が来られるということは聖霊もそこにおられるのですから、三位一体がその人のところに留まられるということになるでしょう。

自分自身より娘を愛した女性、空っぽになって娘の存在そのものと深いコミュニケーションをとろうと願ったこの方のうちに、三位一体はご自分の現存を顕されたと言ってもよいのかと思います。

ところで、神がわたしたちの内に留まってほしいというのは、旧約の民の大きな望みでした。ソロモンは主の神殿を建てた後、次のように祈っています。

神は果たして地上にお住まいになるでしょうか。天も、天の天もあなたをお納めすることができません。わたしが建てたこの神殿など、なおふさわしくありません。(列王上8・27)

ソロモンは自分が建てた神殿に果たして神がとどまってくださるのだろうかと自問しました。たしかに、イエスが来られた後は神がとどまられるのに神殿は必要ではなく、わたしたちが互いに愛し合いさえすれば、神はわたしたちを神殿としてその中に住まわれるとイエスはおっしゃられます。神殿を建てる方が簡単かもしれないという声が聞こえてきそ

うですね。けれど神殿を建てるのは誰にでもできることではないですが、愛し合うことは少なくともすべての人に開かれています。だからこそパウロはコリントの信徒に向かって次のように語ったのです。

あなたがたは、自分が神の神殿であり、神の霊が自分たちの内に住んでいることを知らないのですか。(1 コリ 3・16)

そして時代はくんだり、18世紀に生きたカルメル会修道女、三位一体のエリザベトは自分が神の神殿であるという深い内的な体験のうちに生きました。

わたしたちの内に宿っておられるのは三位一体です。これは天国でわたしたちのヴィジョンとなる秘義です。なんという喜びでしょう。わたしは三位一体のエリザベト、つまりエリザベトは消え失せ、三位一体がわたしを満たされるままになる者です。

21世紀を生きるわたしたちは地球規模のグローバリゼーションの波を受けて、厳しい競争社会のなかで生きることを余儀なくされています。伝統的な共同体はほとんど消え失せ、ばらばらになった個人が深い孤独のなかで生きています。そこに追い打ちをかけるようにコロナ禍はさらに人々を分断しています。

このような世界のなかでわたしたちはどのように生きればよいのでしょうか。エリザベトは言います。「あなたのうちの天国で、聖三位と共に生きてください」と。それはとりもなおさず祈りです。今日のテーマは、神はどこにおられるのでしょうかということでした。神はわたしのうちに、あなたのうちにおられます。ですからどこにいても、どんなときでも祈りは可能です。三位一体は常にわたしのうちで働いておられ、わたしとの絶え間ない対話を求めておられると思えば、梅雨空のコロナ禍にあっても太陽は輝くことでしょう。